

追加解説・肥之川上の物語

垣澤社中では、通称、大蛇退治（オロチタイジ）を「八雲神詠」という堅苦しい演目名を採用しています。この「八雲神詠」は、《肥之川上の場》と《八俣大蛇退治の場》の二つで組み上げています。いわば前半と後半が揃って、「八雲神詠」の物語が完成するわけです。ここでは、「八雲神詠」の前半、《肥之川上の場》を紹介しておきます。動画（9-03）は、後半部分の後半からの舞台だにご理解ください。それでは、《肥之川上の場》の概要紹介です。

○八雲神詠—肥之川上の場

上演時間 四〇分

出演 建速須佐之男命、足名槌之命、手名槌之命、姉姫、櫛稲田姫、八俣大蛇（甲、乙、丙、丁）

場面設定 山中、肥之川上

物語・出雲、肥之川の上流。アシナヅチ、アネヒメ、クシナダヒメ、テナヅチの順に登場。

「八人いた娘も二人だけになってしまった。今年も八俣大蛇が来て、娘は奪われてしまう、小さな社（やしろ）があるから、そこを参って娘の無事を祈願しよう」と手を合わせます。姉姫は今生の別れとなることを意識して、アシナヅチがアネヒメに舞を所望します。アネヒメは、末広之舞（鎌倉之舞）を家族の前で悲しく舞っていきます。すると、天気も荒れはじめ妖しい雰囲気。八俣大蛇がやってきて、舞も半ばのところで姉姫は奪われてしまいました。

姉姫が用いていた箸と椀を肥之川に流して、供養する悲しい老夫婦櫛稲田姫。そこへ、アマテラスの怒りを買って、追放の憂き目にあったスサノオが肥之川にたたずんでいました。スサノオは偶然、箸と椀が流れてきたのを見つけ、取り上げます。

川上に歩くスサノオ、やがて人家にたどりつき、アシナヅチと出会います。スサノオは老夫婦に、箸と椀が流れてきた訳を尋ねます。アシナヅチは一部始終を涙ながらに語り、娘も一人だけになってしまったことを嘆きました。

スサノオは、この悲劇を理解し、大蛇を退治することをアシナヅチに伝えました。娘を助けることも伝えました。スサノオは「私の言う通りに、酒を造りなさい。八つの場所に酒を置いて、大蛇に吞ませなさい。大蛇が酔ったところで、退治する。それから、退治したら、娘と結婚させてもらいたい」と伝えました。アシナヅチは、スサノオの段取りと願いを承知し、スサノオは「それで

はまかせてください」と伝え、引っ込みます。

希望を持つことができた老夫婦は、スサノオの指示どおり、木の実を拾い集め、八塩折の酒を造りはじめます。アシナズチはテナズチとクシナダヒメを家に戻して、酒樽を用意していきました。

●解説 ここで注目するのは、八俣大蛇が甲乙丙丁ですから、四匹も登場するという演出が用意されている、ということです。動画（9-03）では二匹が登場の演出でした。それから、姉姫が登場する演出となっており、先に大蛇に襲われてしまいます。そして一人の娘が残った（最後の娘）ことが強調される演出となっています。肥之川に流れてきた椀と箸は、姉姫のものであったことが説明されています。

本文は垣澤社中の「八雲神詠」を愛甲熊野神社祭礼で実見後に垣澤社中から伺った内容をまとめたものです。

（構成・文責 齊藤修平）